

## 論文の内容の要旨

論文題目 英領インド・アーンドラ地方における地域思想と民族運動

氏名 山田桂子

英領インドのアーンドラ地方では、19世紀末からデルタ地域を中心に社会経済的に地位上昇をしつつあった知的エリートや農民エリートたちが育ちつつあり、彼らの間で母語のテルグ語による教育の必要性が叫ばれると同時に、地域史を学び、また新しく通史を叙述しようと言う気運が高まった。ヴィーレーサリンガムは社会改革と言語改革を結びつける一方、ラクシュマナ・ラオは母語による歴史教育の重要性を説き、当時のエリートたちに大きな影響を与えた。ラクシュマナ・ラオの『概説インド史』やヴィーラバドラ・ラオの『アーンドラ人の歴史』は、アーンドラ人の過去をはじめて人々に広く知らせ、最も影響力を持った書物である。新しい地域史が明らかにしようとしたことは、古典文献による古代史の史実性や民族の雑種性、平等社会の理想像、生まれではなく「行い」によってきまるヴァルナ制度観、英雄重視の志向などである。

アーンドラ人の民族意識の高まりは政治的にはアーンドラ人の統一とマドラス管区からの分離を求めるアーンドラ運動となって結実したが、より深い意識的な変化は、新しい地域史理解は非バラモン運動へも継承されていった。それは、「行い」重視による伝統的ヴァルナ秩序の批判や平等社会の実現など改革主義的側面を持っていたが、同時により厳密に真のヒन्दゥ教社会へ回帰しようという復古主義的な側面があった。また、ここではコミユナルなカースト運動は意味を持たず、より一般的な原則の中で地域全体の改革を目指そうという傾向があり、それにはアーンドラ人意識が重要な役割を果たした。しかし、アーンドラ人意識とはエリート層が社会経済的地位上昇の過程でそれを歴史叙述の中で合理化する役割をもっていたから、地域的差異やカーストによる亀裂などの矛盾を抱える、近代的な架空の概念に過ぎなかった。

農民カーストの「クシャトリヤ」化は、アーンドラ地域史の中で彼らを英雄の子孫「アーンドラ・クシャトリヤ」という特別の位置づけを行うことによって合理化された。ここでは通常のクシャトリヤとは違うが、やはりヴァルナ秩序の枠組みを維持されている。バーヴァイヤ・チョウドリの『カンマの歴史』では、民族運動を背景に「アーリヤ・アーンドラ・クシャトリヤ」という言葉が用いられた。この様な農民エリートは1920年代末より農民運動の盛り上がりの中で政治的ヘゲモニーを握りつつあったことと関係がある。この様に、アーンドラの地域史理解はエリートたちの地位上昇と新しいアイデンティティの模索の中で不可欠なものとして、大きな役割を果たしたのである。